

ROOTS

MAGAZINE

今日のしあわせも、
明日の生きがいも、
自分たちでつくっていく。

足りないものは、つくればいい。

誰もやらないことに、未来がある。

あきらめない限り、不可能なんて存在しない。

先入観にとらわれない。常識に風穴を開けたい。

私たちがつくっていくのは、これからのローカルライフです。



KWGP

Kurihara Wakayanagi Garden Place



YELLOW FLAG

SUMMER BASE



Kurihara Wakayanagi Garden Place 栗原市若柳字川北塚ノ根22-2 10:00-20:00 水曜定休 ※営業時間は変更になる場合がございます。



#1.

Kurihara
Wakayanagi
Issue.

Presented By ROOTS co., Ltd.



いくつになっても忘れられない、風景がある。
いくつになっても忘れられない、人がいる。
いい思い出も、苦い思い出もあるあなたの地元は、
かけがえのない、あなたのROOTSのひとつです。

人も、まちも、過去に後戻りできません。
だからこそ、地元の未来が明るいものであるために
今、私たちに何ができるだろう—。
そんな思いから『ROOTS MAGAZINE』は生まれました。
創刊号は、栗原市若柳エリアの人々を掘っていきます。
ROOTSは探すものではなく、掘るものだと思うから。

ROOTS

地元をたのしむ人が増えれば、
世界はもっとたのしくなる。

Dig Your Roots.

Back to
My Roots.
原点回帰



生まれ育った場所は、自らの人生の一部。
自分自身のアイデンティティーが、
地元でどのように生まれ、
クリエイティビティーの源には、
どのような思いがあるのか。
活躍する地元出身者に、
本誌編集長・吉村慶一が話を訊く対談企画。
記念すべき第一回は、
栗原市若柳生まれの著名人、宮藤官九郎さんです。

宮藤官九郎

クドウ カンクロウ

吉村慶一

ヨシムラ ケイチ

Roots

遊び場はいつも 平野神社だった

宮藤 実はすごく近所に住んでいましたよね？

吉村 そうなんです。小学生の時は、私はいくちゃん（当時地元での宮藤さんのあだ名）のグループについて歩いていて、ザリガニ釣りやクワガタ捕りなんかにちよこちよこ連れて行ってもらっていたんですよ！

宮藤 近くの駄菓子屋でアイスやジュースを買って、だいたいその頃は平野神社で遊んでいましたね～。

吉村 あの頃は、（岡本輪業の息子の）岡本さんとくんちゃん、（八百屋の息子の）けんちゃんとかよく一緒に…。

宮藤 うん、だいたい3人で神社に行って。そうすると友だちが遊びに来る。そういえば弟がいましたよね？

吉村 います、います。僕と弟が「部落野球」の朝練が始まる朝5時ぐらいに、くんちゃんを起こしにいく役目だったんですよ！

宮藤 そうだ！ 小学5、6年生の時だね。岡本さんのお父さんが監督だったんですけど、異常に厳しくてね～。朝のラジオ体操の時間の前に、1時間も練習するんですよ。ラジオ体操の後もまた練習（笑）。午前

中も午後も練習。だんだんエスカレートして、ずっと野球の練習をやっているというね（笑）。何だっけ？ 平野神社から川沿いに歩いて行った先にある…。

吉村 ちびっこ広場？

宮藤 そう（笑）！ そこでキャッチボールをしていたよね。毎日遊んでいたから、思い出しますね～。

Roots

伝説の築高で 伝説を作った

宮藤 築館高校の後輩でもあったんだ。じゃあ入学した時には、もう応援団がなくなっていた？

吉村 はい、でも応援団みたいな生徒会で、ちょっとだけ名残がありました。

宮藤 応援団がものすごくスパルタだね！ 僕が高校3年の年に応援団が廃部になったんですよ。

吉村 くんちゃんの本（『きみは白鳥の死体を踏んだことがあるか（下駄で）』）を読んだんですけど、「対面式」の話が強烈に印象に残っています。

宮藤 そう！（笑）。あれは本当の話なんだよね！

Keiichi Yoshimura



Rankuro Kudo

対面式では新入生が先輩の前で頭を下げて、10秒数えてから頭を上げなきゃいけないんですけど、「オスッ！」って頭をあげるとだいたい「早いっ!!!」って500人ぐらいいる先輩が、（上履きの）雪駄で床をドンドン鳴らすんですよ。すごく怖くて、それで「もう一回やれ！」と言われてやると、今度は「遅いっ!!!」って言われるという（笑）。

一同（笑）。

吉村 入学して2週間以内ぐらいですよ。

宮藤 自転車の追い越し方とかね（笑）。通学途中で先輩に会ったら「〇年〇組の〇〇、追い越します！」と言って追い越さなきゃいけない。その予行演習を対面式でやるんですけど、追い越すと応援団の団旗がちょうど床に置いてあって必ず踏んじゃうんですよ。そうすると、ものすごく怒られるんです（笑）。

吉村 マンガみたいですよ！（笑）。

宮藤 本当に！ 今やっていたら、本当に全部問題ですから！（笑）。

吉村 そんなバンカラな築高に進学した理由は、

何だったんですか？

宮藤 あの頃、地元の男子の進学先は、栗農（栗原農業高校）、築高、若高で、たいてい築高に行ったよね？ 若柳高校は共学ですけど女子の人数が多くて、男子が1クラスぐらいしかなかった。頭がいいと一関（一関第一高校）ですけど、僕は一関に入れなかったんで、消去法で築高だなど。逆に築高に行くのは、迷いかなかった？

吉村 迷いなくですね。

宮藤 僕は入学してすごく後悔したけど（笑）。応援練習の数週間で本当に嫌になって、ゴールデンウィーク頃までは学校を辞めようと思って。結局は卒業までいましたけど（笑）。

吉村 雪駄が標準の上靴の時代でしたよね？

宮藤 標準ですね。外は下駄が標準で。下駄は履いていた？

吉村 私たちの時は、履いていなかったです。外履きは変わりましたが、室内は雪駄でしたね。

宮藤 雪駄だけは残っていたんだ～。僕は卒業まで

夢で見る風景は、今でも地元の若柳なんです。（宮藤）

変な仲間ばかりだったので、 上京しても 誰とも話が合わなかった(宮藤)

下駄で、真冬も下駄で通っていましたね。

吉村 そういえば二つ上の先輩から聞いたんですけど、くんちゃん先輩が水泳大会の時に、ハイレグを着ていたと…。

一同 (爆笑)。

宮藤 (爆笑)!!! もう僕ね、頭がおかしかったんですよ。本当にそんなのばかりですよ(笑)。

吉村 かなり伝説でしたよ!(笑)。

宮藤 築高に入ってから、ちょっと解放されたのかもしれないなあ! だから、東京に出てきてから苦労しましたね。変な友だちばかりだったので、上京して誰とも話が合わなかったですよ〜。

吉村 高校時代はバスケ部で、それと並行してラジオ番組の投稿にも熱心だったんですよ?

宮藤 僕は“おだづもっこ(仙台弁でお調子者)”と言われていたんですよ。小学校の集まりでもそうだし、文化祭も学園祭もお楽しみ会でもそうですが、当時は僕が何かをやるというイメージができあがっていて、それに答えなきゃいけないという、そのプ

レッシャーだけでずっと生きていましたよね(笑)。みんながビックリするようなことをやろうみたいな(笑)。

吉村 小学生の頃も、いつもふざけて周りを笑わせていましたよね!

宮藤 大体そうですね。うちの父も酔っ払うと、だいたいそんな感じだったんですよ。

吉村 小学校の校長先生でしたよね?

宮藤 そう。家ではすごく厳しいんですけど、どうも家族の見てないところでは、大して僕と変わらない感じだったと聞きましたね。

Roots

8月16日だけは 毎年帰省したい

吉村 大学進学で地元を離れる選択をされましたが、それはどうしてですか?

宮藤 いろいろ考えたんですけど、その当時興味を持てるものがあまりなかったんです。僕の友だちはみんな就職組で、進学する友だちがあまりいなかったのもあって、あまりよくわかってなかったんだけど、とりあえず日本大学芸術学部に入れば何者かになれるんじゃないかと思って。しかも日芸の受験科目が、当時は国語と英語と面接だけだったんです。倍率は高かったですけど、入れるんじゃないかと勉強したら何とか入れたんです。けれどもさっきも言ったように、大学には完全に馴染めなかった。バブルの頃だったから周囲はみんなイケイケで、最初の一年は就職で東京に出てきた地元の友だちと、毎週末会っていましたね。今まで友だちがいなかったことなんてなかったので、上京して最初の1、2年はどうしたらいいかわからなくなっちゃった。それで芝居を見るようになったんですよ。何か自分が高校の文化祭でやっていたようなことを、やっている人がいるんじゃないかなと思って(笑)。そのうちにお芝居を手伝うようになって、いつのまにかスタッフになって、結局大学も辞めちゃったんですよ。だからその頃、母親(文房具屋の)お客さんに「息子さんは何をしてい

るんですか?」と聞かれても、たぶん何も答えられなかったと思うんですね(笑)。

吉村 地元が嫌で、離れたかったわけではないんですか?

宮藤 全然嫌じゃないですよ。自分が文房具店をやっている姿は想像できないんですけど、夢で見る風景は今も地元の若柳なんですよ。まだ平野神社が川沿いにあった時のお祭りとか、すごく思い出ですよ。今年(2021年)も花火大会(若柳夏祭り流灯花火大会)はなかったんですよ?

吉村 なかったですね〜。

宮藤 最近は、娘が毎年夏休みに実家に遊びに行っていたので、たまに帰っていたんです。花火大会の日は、すごい人出だよ?

吉村 打ち上げ花火の数も増えているんですよ! じわじわと盛り上がっていますね〜。

宮藤 そうなんだ! けど普段は、びっくりするぐらい若柳のまちに人が歩いていない(笑)。

吉村 そうですね(笑)。

宮藤 東京から人を連れて行くと「こんなに人がいないの!?!」と驚かれるぐらい人がいないんですけど、毎年8月16日だけは、「どこにいたの!?!」というぐらい、びっくりするぐらい人がいるよね?

吉村 近隣から集まりますね。狭い土手に露店が並ぶんですけど、今も変わらずごった返しますね。灯籠流しと花火と、土手の露店は風情があって。

宮藤 本当にキレイですよ! 8月16日だけは毎年帰りたいですね。いろんなまちの花火大会を見たけど、まるで引けを取らない。うちの母がよくお金を出して、花火の協賛を出していたなあ〜。しかも僕の名前で、「いだてん(NHK大河ドラマ『いだてん〜東京オリムピック噺〜』)をよろしく願います」って勝手にPRしたりしているんですけど(笑)。

吉村 (笑)。これまでの話を聞いていると、宮藤さんのルーツは子どもの頃という…。

宮藤 たぶんそうですね。自分では違うことをやっているつもりですけど、地元の友だちが僕の芝居を見ると「何も変わってない。やっていることは一緒だな」と言われます(笑)。

Roots

若柳に人が集まる 場所があるといい

宮藤 会社はいつからやっているんですか?

吉村 8年前、40歳の時に独立して会社を作りました。そこからいろんな人たちとご縁があって、Aコープ跡

Profile

吉村慶一

1972年宮城県栗原市生まれ。
91年、宮城県立築館男子高等学校卒業。
東京の会社に勤務後、99年に地元に戻り、父親が経営する株式会社ヨシムラに就職。
13年に同社を退職し、栗原市若柳に株式会社ROOTSを設立。代表取締役就任。
現在はオーストラリア、ニュージーランド、ミャンマーに現地法人を設立。
自動車リサイクル事業を軸に、中古車販売事業などを展開。



地の地域活性化を考えるようになりました。

宮藤 それはすごいよなあ! 当時の若柳で一番大きいスーパーですよ。あそこに何か作らないのはもったいないよね。僕がいた時から30年以上経っているので変わっているんですけど、いいほうに変わっているところもあるけれど、人がわちゃわちゃいたところが大きな道路になっちゃって、小学校の時の通学路もなくなっていたりすると寂しいですよ。当時とは違うとわかっているのに田舎に帰るたびに「ああ、違うんだよな」って。(バンカラな)築高も(移転して)もうないしね…。

吉村 なくなっちゃいましたね……。「ピノキオ」も。

宮藤 「ピノキオ」!!(笑)。高校のすぐ近くにあった駄菓子屋で、コッペパンにケチャップだけ挟んだやつが30円で売っていたんですよ。

吉村 (笑)。地元が変わったと思いはめたのは、いつ頃ですか?

宮藤 橋が広くなった頃かなあ〜……。そこから帰るたびに、あれもなくなった…と寂しくなって。今やその当時オープンした大型店舗もなくなっちゃっているからね。母に「買い物はどこに行くの?」と聞くと「車で築館まで行く」と。

吉村 そうなんですよ。

宮藤 若柳に人が集まるところがあったらいいのになあ〜と思いますね。

吉村 それで何とか頑張っ、Aコープがあった場所に複合施設を造ろうとしているんです。

宮藤 えっ! マジで?!

吉村 まちを元気にしようと思ひまして。



Profile

宮藤官九郎

1970年宮城県栗原市生まれ。
91年より大人計画に参加。
以降、脚本家・監督・俳優として、幅広く活動。
近年の主な脚本作に、大河ドラマ『いだてん〜東京オリムピック噺〜』、TVドラマ『俺の家の話』、映画『土竜の唄 FINAL』などがある。
また、パンクコントバンド「グループ魂」では“暴動”の名でギターを担当。

宮藤 すごい!! うちの実家のめっちゃ近所じゃないですか。ぜひやってください! ちなみに、人が集まる場所を作りたいと思ったのはいつ頃から?

吉村 母に今回のプロジェクトを話したら「そういえば、あんたは中学校ぐらいからそんなことを言っていたもんね」って。

宮藤 えー!!

吉村 あまり記憶がないんですけど、ずっとそう思ってきたのかな。

宮藤 地元を、ということ?

吉村 そうですね。夏祭りが好きなので、盛り上がるようなコトや場所を提供できたら...と何となく思っていました。

宮藤 何かきっかけがあったわけでもなく?

吉村 ないですね。宮藤さんは、地元が今後どんなまちになればいいと思いますか?



宮藤 帰った時に集まれる場所というか、飲み屋もあるようでそんなじゃない? 岡本さんに連絡して「明日帰るんだけど」と話すと、「じゃあ、ちょっとどこか押さえておくよ」というので、飲み屋に行くのかなと思ったら集会所だったことがあって(笑)。みんなでいろんなものを持ち寄って、それはそれで楽しいんだけど、もうちょっと何かあるといいのかなって。それから、若い人たちが地元から出て行かないような工夫があるといいですよね。昔はボウリング場や映画館とか、若い人たちが集まる場所があったような気がするんですね。僕は自分の将来を考えて東京に出てきたけれど、出てきたからこそ思うのが、東北の人とひとまとめに言うのも何ですが、あまり地元の自慢をしない人が多いんですね。むしろどちらかというと、謙遜する人ばかりで「うちのまちに、こんなものがあるんですよ!」と声高にいう人が少ないじゃないですか。だけど誇れるものがいっぱいあるんですよ。僕も白鳥のことぐらいしか言わな

まちを
元気にしようと、
自然と考えるように
なりました
(吉村)

いですけど(笑)。そんな施設ができるなら、自慢しようとなるんじゃないかな?

吉村 自然と人が集まれるような場所になればいいなあと。ただそれだけだと続けるのが難しいと思うので、遠方からもわざわざ来てもらえるような場所にするための工夫は必要だと思っていますね。

宮藤 大きな通りからすぐだから場所もいいよね～。ぜひ実現してください!

吉村 ありがとうございます! 楽しみにしててください!



ROOTS MAGAZINE WEB では
対談のディレクターカット版を公開中。
QRコードからアクセスしてください。
<http://magazine.roots-hd.jp/>



Roots.
of
Wakayanagi

若柳で育った、二人のルーツのあれこれ。



宮城県築館高等学校

1901年創立。スクールアイデンティティーは「臥薪嘗胆」。生徒は下駄履き、腰に学校指定の校章が入った手拭いをぶら下げ、男子校のバンカラ気風を伝統としていた。2005年に共学化。



平野神社

迫川堤防拡幅工事と街路事業により、1997年に移転改築。1月にはどんと祭。2月の節分では境内で豆まきを開催。10月の例大祭では、奉納神楽大会や神輿渡御などが行われる。



文具センタークドウ

1949年に紙と紙袋を扱う「宮藤紙店」として創業。宮藤官九郎さんの実家で、ファンの聖地としても知られる。店内には宮藤さんの関連グッズや写真などが飾られ、資料館のような趣も。



若柳夏まつり流灯花火大会

1902年から始まった伝統ある祭事で、若柳の中心を流れる迫川に、赤や青の灯籠が浮かぶ様子は幻想的。河川敷に並ぶ屋台は昭和風情が漂い、約5000発の花火が真夏の夜を彩る。



What's
Your
Roots?

What's
Your
Roots?

栗原・若柳の人たちに聞きました。

年齢も職業もさまざまな、栗原若柳の皆さんにインタビュー。

「あなたの大切なルーツは何ですか?」という問いから、見えてくるものとは?

Q1. あなたの大切なルーツとは?

Q2. あなたにとって栗原若柳といえば?



NAME

佐藤智さん

栗原市長

築館高校卒業
座右の銘は「誠心誠意」

Q1.

生まれ育った築館黒瀬地区と、隣人の助け合い精神。小さい頃からずっと、隣のおばあちゃんハウスの勝手口に野菜を置いてくれます。親父が急逝した時も、隣近所の方が助けてくれました。ここに生まれて良かったと常々感じます。

Q2.

合併前までは築館と若柳は人口が近く、いわゆるライバル意識が相当強かったです。実は、初めてくりでんに乗ったのも合併後です。迫川の堤防の桜は、素晴らしいですね。若柳に限らず、栗原の大きな遺産です。

What's
Your
Roots?



13

NAME 吉村黄吉さん

株式会社ヨシムラ 社長

岩手県一関市に本社がある
資源リサイクル会社の創業者

Q1.

人との絆。創業から55年、これまで多くの
人に支えられ、会社も全て人で成り立っ
ています。コツコツ積み上げてきたのは、
社員を豊かにしたい思い。人それぞれの
個性を受け入れ、安定した会社にするこ
とが自分の使命です。

Q2.

若柳夏祭り流灯花火大会。毎年協賛して
います。コロナ禍で行事の中止が相次ぎ、
不便を強いられていますが、SDGsを見直
すいい機会だと感じます。ピンチをチャン
スに変え、人間として生きることについて
考えたいです。

What's
Your
Roots?



14

NAME 阿部かつこさん

銀座ホルモン 店主

地元民に愛され続ける
焼肉店の名物ママ

Q1.

この店。私が営む以前は「ホルモン銀座」
というお店で、常連さんから「銀ホル」と呼
ばれて親しまれていました。昭和55年に
この店を引き継いだ時、せっかくなので
「銀座ホルモン」に名前を変えました。

Q2.

桜と花火大会。迫川の土手の桜を、小さ
い頃からずっと眺めてきました。いつ見て
もきれいで、毎年見ても見飽きることはあ
りません。花火大会は毎年よその町から
たくさん人が来て、若柳のまちが一番にぎ
わいます。



What's Your Roots?

NAME 大久保 渚さん
貿易事務

2022年に、沖縄県から若柳に移住

Q1.
地元です。ニンニクの産地として知られる青森県の田子町です。小学生のときに赴任してきたALT(外国語指導助手)のアメリカ人の先生と出会い、将来、英語を使う仕事を目指すきっかけになりました。

Q2.
新天地であり、夢を叶えられる場所です。英語を使う仕事がしたくて、2022年1月に沖縄から引っ越してきました。若柳は地元には雰囲気がそっくりで、懐かしい気持ちになります。これから少しずつ、いいところを見つけたいです。



What's Your Roots?

NAME 熊谷 孝治さん
有限会社千葉産業 社長

地元・若柳にある土木施工管理会社の二代目

Q1.
地元。若柳で生まれ育ち、この町に育てられた思いがあるから。祖父はこの地で馬車ひき、父は建設業を始めました。父の働く姿を見て、自分もここで父の後を継ぎたいと思ってきました。この町に愛着を感じています。

Q2.
銀ホル。学生時代から通い続けているお店です。若い頃は金がなく、ホルモン一人前と瓶ビール1本、メはラーメンがお決まりでした。自分の青春の1ページの場所です。

What's Your Roots?

NAME 千葉 仁さん
千葉農園 代表

伊豆沼レンコンの生産者



Q1.
家族です。今は家族9人で、にぎやかに暮らしています。8年前に会社員を辞めて、レンコン専業農家に転身しました。ただ農作業は一人では難しく、家族の協力なくして成り立ちません。妻と長女、次男の4人で生産しています。

Q2.
ふるさとです。農家の長男として生まれたこともあり、家を守るという使命から、これまでずっとこの町を離れることなく生きてきました。伊豆沼の近くでレンコン作りを始めてから、飛来する白鳥の美しさに癒されています。

What's Your Roots?

NAME 桐井 萌花さん
クリエイター

若柳地織に魅了され、静岡県から移住

Q1.
デザインやものづくり。小さな頃から工作が好きで、高校時代もステンドグラスや七宝焼などの授業が好きでした。専門学校では服飾系のデザインを学びました。自分でデザインして形にしたり、それが誰かに喜んでもらえるうれしさも、今の自分につながっていると思います。

Q2.
若柳地織。2018年に地織に出会い、地織のことをもっと知りたいと思い、2019年に若柳に引っ越してきました。地元の人でも意外と若柳地織を知らない人が多いので、伝統ある綿織物の良さを広く伝えていきたいです。



What's
Your
Roots?



NAME
榎原奈緒子さん 歯科助手

生まれも育ちも若柳・勤続21年の大ベテラン

Q1. ファミリー。夫と子どもはもちろん、院長はじめ職場のスタッフとも家族のように仲良し。いつも感謝しています。

Q2. 生まれも育ちも若柳なので、大好きな場所です。周りの人は明るくて元気で、いつもニコニコしている人が多いです。

What's
Your
Roots?



NAME
佐々木長悦朗さん 福子さん ミート&デリカ丸長 店主

週末には行列ができる、若柳の台所

Q1. この店。20歳から働き50年。結婚して45年になります。妻の発案で加工品の販売を始め、二人三脚でやってきました。

Q2. ふるさと。ここで生まれ育ち、この町から動いたことはありません。若柳の皆さんのセカンドキッチンでありたいです。

What's
Your
Roots?



NAME
樋渡靖弘さん 動画クリエイター

秋田→神奈川→宮城。古民家民宿開業に向けセルフリノベ中

Q1. 「自立」と「ネットワーク」。自立できれば他者に幸せを分けられ、ネットワークがあれば、やりたいことを実現できる。

Q2. 「拠点」。ご縁があって2021年に若柳に越してきました。活動できるのは皆さんの協力があってこそ。運命を感じています。

What's
Your
Roots?



NAME
清和浩介さん 清和建装 社長

志波姫出身・内装業のプロフェッショナル

Q1. 若柳。出身は隣の志波姫ですが、若柳で暮らして21年。起業したのもここ若柳で、生活の中心です。

Q2. 住みやすいまち。ここに住んでから、もめごとやいざこざを一度も経験したことはありません。穏やかなのが魅力。

What's
Your
Roots?



NAME
Rizal Bin Baharinさん 飲食店スタッフ

マレーシアから若柳へ移住。元ゲストハウス店主

Q1. 健康。健康でなければ、自由に動くことも食べることもできず、健康なら心配ごとやストレスにも負けない。今私は元気です。

Q2. 伊豆沼や栗駒山など景色がきれい。母国のマレーシアは雪が降らないので、雪が好き。楽しんで生活しています。

What's
Your
Roots?



NAME
高橋真紀さん 美容室Giselle オーナー・スタイリスト

見た目のおしゃれもエイジングケアもおまかせ

Q1. 美容師。美容師として自立できたからこそ、ささやかながらも人の役に立つ仕事ができていると感じているので。

Q2. ホーム。ずっと育ってきた場所。地元で開業して8年。多くの皆さんに喜んでもらえる店にしていきたいです。

What's
Your
Roots?



NAME
渡辺康孝さん 株式会社ショベル 社長

建設機械リース業を登米市で創業

Q1. 人。仕事もプライベートも、人が大切。友人、知人を本当に大切に思っているため、仕事でも友人、知人からの依頼は最優先です。

Q2. 遊び場。10代から友人の9割が若柳。みんながみんな知り合いばかりで、親戚のような存在だと感じています。

What's
Your
Roots?



NAME
国本新一さん ガーデンレストラン「スプリングロード」 料理長

石越出身・2021年に東京からUターン

Q1. 地元・登米市。30歳で地元に戻り、町を盛り上げたいという思いから、2021年春に東京からUターンしました。

Q2. 青春時代を過ごした町。町の人によくしてもらい、いつか恩返ししたかった。人が集まる料理を作りたいです。

KURIHARA WAKAYANAGI GARDEN PLACE

〈栗原若柳ガーデンプレイス〉

栗原若柳の新スポット

KWGP

2022.春
グランドオープン!

栗原市若柳エリアの
地域創生プロジェクトから生まれたKWGPとは、
一体どのような施設なのか。
「何ができる?」「どんな楽しみがある?」
施設誕生の経緯と
その中身をひも解きます。



人が集まる“場”を作るため クラウドファンディングで 支援を募る

巨大な倉庫も併設され、広さはちょっとした工場レベル。敷地にして約4700平方メートル。かつて地域で一番を誇ったスーパーマーケットが、レストランや全天候型のインドアパーク、BBQ&キャンプサイトなどを設けた複合施設へと生まれ変わる。

「栗原若柳ガーデンプレイス(KWGP)」と名付けられたこの場所は、

本誌の発行元でもある株式会社ROOTS(本社:栗原市若柳)が立ち上げた、地方創生プロジェクトのもとで計画された。

「生まれ育った町を、どうか活性化できないかとずっと構想していました。2年前にこの物件の話をいただいた時、地方創生をやるならこのタイミングでやってみようと思えました」と本誌編集長(ROOTS代表取締役社長)の吉村慶一は説明する。

自動車リサイクル・中古車販売業を主軸とする会社では、「雇用創出」「格差是正」「地域貢献」の3つの理念を掲げ、発展途上国でも事業を展開。吉村にとってKWGPを含めた栗原若柳の地方創生は、利益ありきのビジネスではなく、チャレンジだと言い切る。

「マーケティングの観点からいえば、栗原若柳の地方創生はポテンシャル

が低く、投資リスクは高いと言わざるを得ません。それでも世のため、人のためになることにチャレンジしたいというか、するべきじゃないかと思ったんです」

土地・建物の取得を含めた総事業費は約1億8000万円。住民や賛同者と一体となって事業を進めようとクラウドファンディングを行い、目標の1200万円を達成した。

「地域外にも広く私たちの思いを広めたいと考えて実施したところ、金額や人数など目に見えて応援されていることが分かり、周囲からの期待の大きさを実感しました。今は支援して下さった皆さまのためにも、この町をめっちゃ元気にするしかない! という思いです」

「栗原若柳ガーデンプレイス」という名称には、若柳のランドマークと

なり、海外の公園のように子どもはもちろん、全世代の人々が気軽に立ち寄り、自然と人が集まる場にしたいという思いが込められている。「地方創生」の本来の意味を調べてみると、複雑多岐にわたっているが、要約すると各地域がそれぞれの特徴を生かし、自律的かつ持続的で魅力ある社会を作り出すこと。世のため人のためにできることをしたいという思いが人一倍強くても、実際に赤字経営が続けば、持続化は不可能だ。

「継続するためには、町の人たちの声になるような、できれば地元の人たちと一緒にKWGPを育てていきたいと思っています。ここを拠点にどこまでチャレンジできるのか、今まさに手探りで取り組んでいるところです」

*Kurihara
Wakayanaqi
Garden Place*



KWGP

Kurihara Wakayanaqi Garden Place

Spring Rd.



23



ガーデンレストラン 【スプリングロード】

非日常の空間で
東京の有名店で修業したシェフが
とっておきの一皿を

若柳にこれまでなかった、ステーキやハンバーガー、パスタなど本格派の味を気軽に楽しめる。コーヒーは、仙台で人気のコーヒー専門店「FLATWHITE COFFEE FACTORY」の豆を、ハンドドリップで提供。ビールは、県内で2店舗しか提供していないイタリアンプレミアムビール「ペロニ」を常備。100本以上をストックするワインセラーには、南三陸ワイナリーなど地元産も。

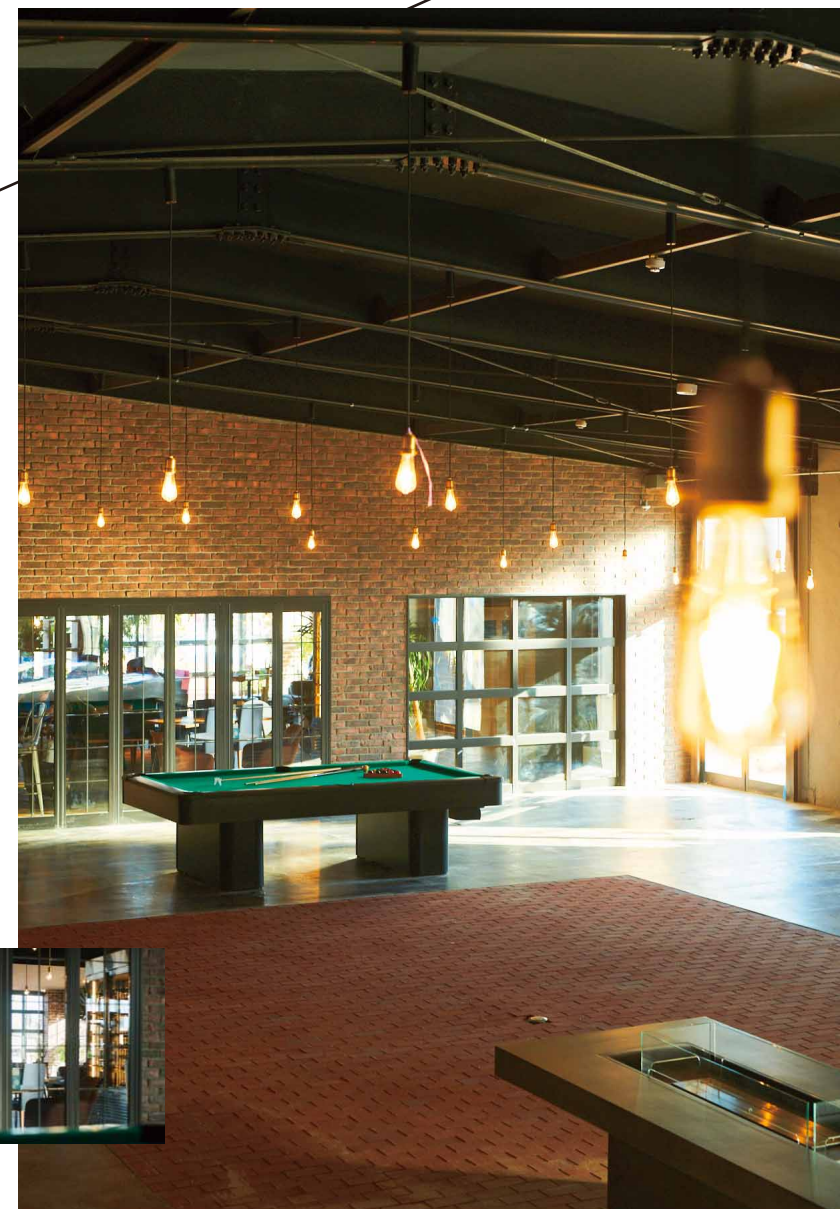


Yellow Flag

全天候型ホール インドアパーク 【イエローフラッグ】

雨の日でもうれしい
遊び場 & イベントスペース

レストラン奥の広々としたスペースは、全天候型の遊び場としてはもちろん、コンサートや講演会、展覧会、マルシェなど、多目的で使用可能。人と人、人とモノ、人とコトが出会える場所に。



24

Summer Base

若柳コミュニティピクニック 【サマーベース】

手ぶらでBBQ・安全あんしん街中キャンプ

レストラン横に広がるガーデンは、街の中で気軽にキャンプやBBQができる場所に。準備不要で手ぶらでOK。食材や後片付けもすべてお任せ。BBQ機材はもちろん、トイレ&シャワールーム、サウナも完備(予定)。宿泊は通常のテントサイトと、より快適なグランピングサイトから選べる。子どもやビギナーの方のアウトドアデビューにぴったり。



USED
CAR

Chu & Co.



ユーズドカー
【CHU&Co.】

車の“困った”に応える
中古車 &
メンテナンスショップ

レストランに隣接する「CHU&Co.」は、中古車の買取と販売、車検&メンテナンスの専門店。自分に合う中古車を探している人、メンテナンスや修理についてお悩みの人に、親身に対応。食事のついでに、気軽にマイカーの相談ができる。



AMERICAN
CLASSIC
CAR

*James Fifty
Company*

アメリカンクラシックカー
【James
Fifty COMPANY】

ミュージアムとしても楽しめる
アメリカンクラシックカー専門店

1950年代を中心に、アメリカから直接買い付けた国内未登録車の展示・販売を行うアメリカンクラシックカーミュージアム。車両本体だけでなく、専任のメカニックによるメンテナンスも行う。



K U R I H A R A
W A K A Y A N A G I
G A R D E N
P L A C E

何もできないからこそ、
何でもできる。
多くの人の、
思い出を作る場所に。

株式会社ROOTS
地方創生プロジェクトマネージャー
長谷川 太郎さん



KWGPのプロジェクトは、この町の“ない”をなくす、という思いのもとで始動しました。僕自身が移住者なので、「若柳には何がない、何があるとみんながうれしいのだろうか？」という視点から、ステーキ店がない。おいしいイタリアンも、おしゃれなカフェもない。それなら作ろう！と詰め込んでこの形が出来上がりました。

先行オープンしたレストランは、複数のメディアで取り上げられたこともあり、おかげさまで宮城県中の多くのお客様にご来店いただいています。地元の皆さまにも喜んでいただき、「ここで音楽会を開きたい」など、さまざまなイベントのご相談も受けています。KWGPができたことによって、誰か

のやりたい気持ちが刺激され、栗原にこれまでなかった文化が根付く。そんな可能性を感じています。

新しいものが生まれるきっかけは、結局のところ人だと思えます。KWGPはそうした“人”を呼び寄せる装置として機能させたい。具体的には、2階をレンタルオフィスやコワーキングスペースにして、「起業したい」「新しいことにチャレンジしたい」という人たちにに向けて、新たなビジネスや交流が生まれるような場にできれば。どこまでできるかは未知数ですが、起業のお手伝いや取引企業とのマッチング業務なども視野に入れています。

若者を中心に、若柳栗原の周辺の人たち

が気軽に集まれるスポットにすること。そのためにも、自分たちだけで完結するのではなく、地元の人が自分ごととして、一緒にイベントを企画したり、イベント運営に参加してもらうことが大事です。一方で、レストランウエディングなど、多くの人の思い出を作る場所になればいいと感じています。

大きな目標として、移住人口を増やすこと。将来的に人口が増えないことには、町を活性化できなかったことにならないからです。ゆくゆくは「KWGPのスタッフになりたいから移住してきた」と言ってもらえるような施設になれば。その時が、私たちのプロジェクトの成功と言えるのかもしれない。

創立以来、ユニークな人材を輩出する学校として名を馳せ、各界に卒業生を送り出している「宮城県築館高等学校」。
 県北の名物高校「築高」OBによる、男子校的クロストーク。

築高魂

The Tsukidate High School Spirit



経営者目線で、専門家目線で、
 栗原の未来と地方創生の具体策を語り合ってみた。

今の自分と栗原の現在地

高橋 今回のテーマは「地方創生」ということなんですけど、どちらかといえば私は栗原を出ていった人間です。大学に進学した時に栗原には二度と帰ってこないだろうと思っていましたし、栗原では開業できないと思っ仙台で開業しました。ですから正直なところ、こういった話に自分がどう関わっているのか戸惑っていますが、何かしらの形では協力していきたいと思っています。

佐藤 地方創生については、僕は現在、地元食材を活用した手作り体験や企業向けのワーケーションプログラムの実施など、食を通して地域の魅力を発信しています。今後も農業者の立場から、地元産の食材加工品の開発など、さまざまな形で関わってきたいと思っています。

村山 僕は現在、東京都内で飲食店を数店舗経営しています。ふるさとへの恩返しという思いから、今年は、宮城にシードルの工場を設立しようと計画中で、現在工場を作っているところです。そのほかにも、宮城の農産物を使って、東京で商売したいと思っ、いろいろとアイデアを構想しています。

小田嶋 私も高橋さんと同じく、栗原を捨てた人間です。現在は仙台で弁護士をやっているんですけど、ひょんなところで史郎さんと再会して、その縁で吉村さんを紹介いただき、仕事を通して地元に関わっています。

築高は『魁!!男塾』の世界

佐藤 皆さんが築館高校に入学した理由は何でしたか？

村山 あの頃は築館小・中学校に通う子どもたちって、築館高校に進学することが

ほぼ決まっていたよね。

小田嶋 そうですね。あまり選択肢はなかった気がします。

村山 入試を受けたことさえ忘れるぐらい、エスカレーター式なイメージです(笑)。

佐藤 中学までは男女共学ですけど、築館高校は男子高じゃないですか？ その辺りは気にならなかったですか？

村山 入学した時はあまり気にしていなかったけれど、途中からおかしいなと(笑)。

佐藤 途中から色のない生活に気がつくというか(笑)。

小田嶋 サッカー部は、女子とほとんど接触がないですよね？

高橋 そうですね。バスケ部は他校に女子部があるから接触がありそうですけど.....

小田嶋 奏楽部はその点、遠征で女子校に行くことがあるんですけど、意識しすぎてしまって、自意識過剰な態度をとっていましたね(笑)。高校を卒業してから、女性とまともに口を聞けるようになるまで、半年ぐらいかかりました(笑)。

村山 言っている意味はよくわかります。自分もどどん、女性に話しかけるようになっていましたね(笑)。

小田嶋 私が入学する一年前に、応援団は廃部になったんですけど、当時の応援団の先輩って、スキンヘッドやひげを生やしていたり。見るからに高校生離れしていて、まさに『魁!!男塾』(週刊少年ジャンプに1985年~1991年まで連載された、宮下あきら作のマンガ)の世界でした。

村山 そうですね、そんな感じですね。帽子を壊して、手ぬぐい到下駄で通学していた人がいましたからね。

小田嶋 そんな高校時代の話をすると、「世代が違うだろう!」って大学の仲間から

突っ込まれました。全く信じてもらえませんでしたね。

高橋 昔から脈々とあった男子校・女子校が別々であることの流れというか.....。親父も築高出身だったから男子校が当たり前だと思っていたけれど、あれは何なんですかね？

佐藤 なかなか強烈な高校でしたよね。でも女子がいなかったからできていたことって、ありましたよね(笑)。

村山 今でも細かな出来事を思い出せるぐらい、アクの強い学校だったけれども、それでも人生を俯瞰したときに、男子校の時代があってもいいように今は思えますね。

「食」はあるけど「職」はないというジレンマ

吉村 小田嶋先輩は、仙台で暮らすようになってから、築館には全く帰っていないんですか？

小田嶋 うちの両親の身体が弱くなってきているので、姉と交互に隔週で帰っています。最近は、築館のウジエ(スーパー)や(志波姫の)ヨーク(ベニマル)で買い物もしています。

佐藤 そうすると、栗原も変わったと感じましたか？

小田嶋 商店街は、もうゴースタウンみたいですよ。やっているお店でも、お客さんが入っている気配がなかったり、ずっと閉まっている店もあるし。何をどうやって生活しているんだろうって思ってしまうですね。

村山 本当にそうですね。築館のバス乗り場の周辺といったら寂しいもんですよ。

小田嶋 そうですね。ちょっと時代的に厳しいですけど、どうにかならないかなって。



村山 敬さん

1974年栗原市築館(旧・築館町)生まれ。築館高校時代はサッカー部に所属。飲食店経営者(「株式会社敬香堂飲料店」代表取締役社長)で、現在は東京都在住。



小田嶋 章宏さん

1972年栗原市築館(旧・築館町)生まれ。築館高校時代は吹奏楽部に所属。弁護士(「大町法律事務所」所長)で、現在は仙台市在住。



高橋 史郎さん

1973年栗原市築館(旧・築館町)生まれ。築館高校時代はサッカー部に所属。税理士(「高橋史郎税理士事務所」代表)で、現在は仙台市在住。



佐藤 耕城さん

1974年栗原市若柳(旧・若柳町)生まれ。築館高校時代はサッカー部に所属。農産物の加工販売を手掛ける農業生産法人「有限会社伊豆沼農産」取締役社長で、現在は栗原市在住。

村山 なんとかしたいですよね。

佐藤 まちが衰退していった理由って何ですかね？

吉村 純粋に都市部に人が流出していったんじゃないかな。

高橋 人口が減って行って、地元に残る人たちが少なくなってくると、地元で働ける場所を作っていくのがますます難しいという見方もありますよね。一方で、コロナ禍でテレワークが浸透して地方に家を買おうという人が出てきているのも事実としてあって。そういう人たちに、栗原の魅力を発信できればいいんじゃないかと思えますけど。

村山 KWGPのように新しい形を模索して、人を集めることができればいいと思うけれど。

高橋 今のままでは仕事がないでしょうからね。

村山 仕事を作りつつ、地元でスローライフな生き方をしたいって人を呼べるようなものを作って.....。

佐藤 一般的に、「食べるために仕事をする」とみんながいうじゃないですか。でも栗原という地域は、根本的に食べるものはあるんですよ(笑)。だから食べものが金銭的価値なのかはわかりませんが、食べもの自体はありますので、そうした資源を大

テレワーク、二拠点生活 働き方が変わると 田舎が住みやすい場所になる

吉村 敬ちゃんは東京に店を持っているけれど、ふるさとのことを考えてシードル工場を立ち上げようと思ったんだよね？

村山 帰って来られるふるさどがあるって、すごくありがたいことですよね。子どもの頃は、このまちから出たくてしょうがなかったですけど、今は昔と違って都会との距離感も縮まったから、どこにいても仕事できるっていうか。

吉村 そうなんだよね。

村山 こっちに拠点があれば、東京でも県外でもね。吉村さんを見ていると、別にどこに本社があってもいいんだなって。

吉村 それは思ったね。自分も若い時は、何となくここにいても窮屈で、違和感があったから「どっかに出て行かなくちゃ。ここにも不毛だな」みたいなことを思っていたかもしれない。

村山 その当時は、自分で新しいものを生み出すという発想はなくて、誰かが与えてくれるものを求めていたよね。「ここには何もない」みたいな。

小田嶋 史郎さんは、地元でやろうと思っ

だと思ってくればいいなど。田舎に拠点を持って楽しそうにやっていたら、そういう生き方への憧れというのが芽生えるかもしれない。

佐藤 そう考える人たちは、今後たくさん出てきそうな気がしますね。

村山 東京で店をやろうと思うと、とんでもなくお金がかかるんですよね。築館だと、駅のところから朝市があったところの一体が全部空いているんです。そこを5坪くらいに区切って、いろんな種類の飲食店を入れて、屋台風で常にいろんな人が商売できるようにすれば、ちょっと話題になって人が集まるかもしれない。

吉村 僕は起業したい人たちに向けて、KWGPの2階にレンタルスペースを設置して、そこで史郎が税理士の観点からセミナーをやったり、小田嶋先輩がリスク管理みたいなセミナーやったり、敬ちゃんが経営セミナーやったり。そんなサポートができると思っています。

佐藤 一方で、起業をしたものの、続けていくことが実は大変だったりもしますよね。10年20年存続することで企業活動や社員の生活が町に根付くように、起業後も、この地域でさまざまなサポートを受けられるような仕組みができていけば、栗原が特別な



事にすることで、ここで起業する人が増えてくる可能性があったりしないのかな。村山さんや吉村さんのような起業家の姿を、多くの後輩に見せてあげられたらいいのかなと思いますけどね。

吉村 地域ならではの伝統的なものを受け継ぎながら、次世代に響くことも取り入れることが大切な気がしている。宮藤官九郎さん脚本のTVドラマ『俺の家の話』(TBSテレビ系/2021年)の中で、能の家の家族が描かれていたけれど、栗原は南部神楽の宝庫だから、それも魅力的な観光資源になると思う。

ていることはあるんですか？

高橋 ないです(笑)。

佐藤 税理士業は栗原でやろうと思うと何が必要ですか？やっぱりクライアント？

高橋 そうですね。起業する人がいっぱいいて、魅力がある街ができて、人が集まってという循環ができればいいですけど.....。

村山 僕は、自分らが東京とか仙台に行きたかったという部分を、逆の発想でできればいいなと思っています。自分がふるさどで楽しそうに仕事をしているのを見て、東京の店のスタッフがそういうのも“アリ”

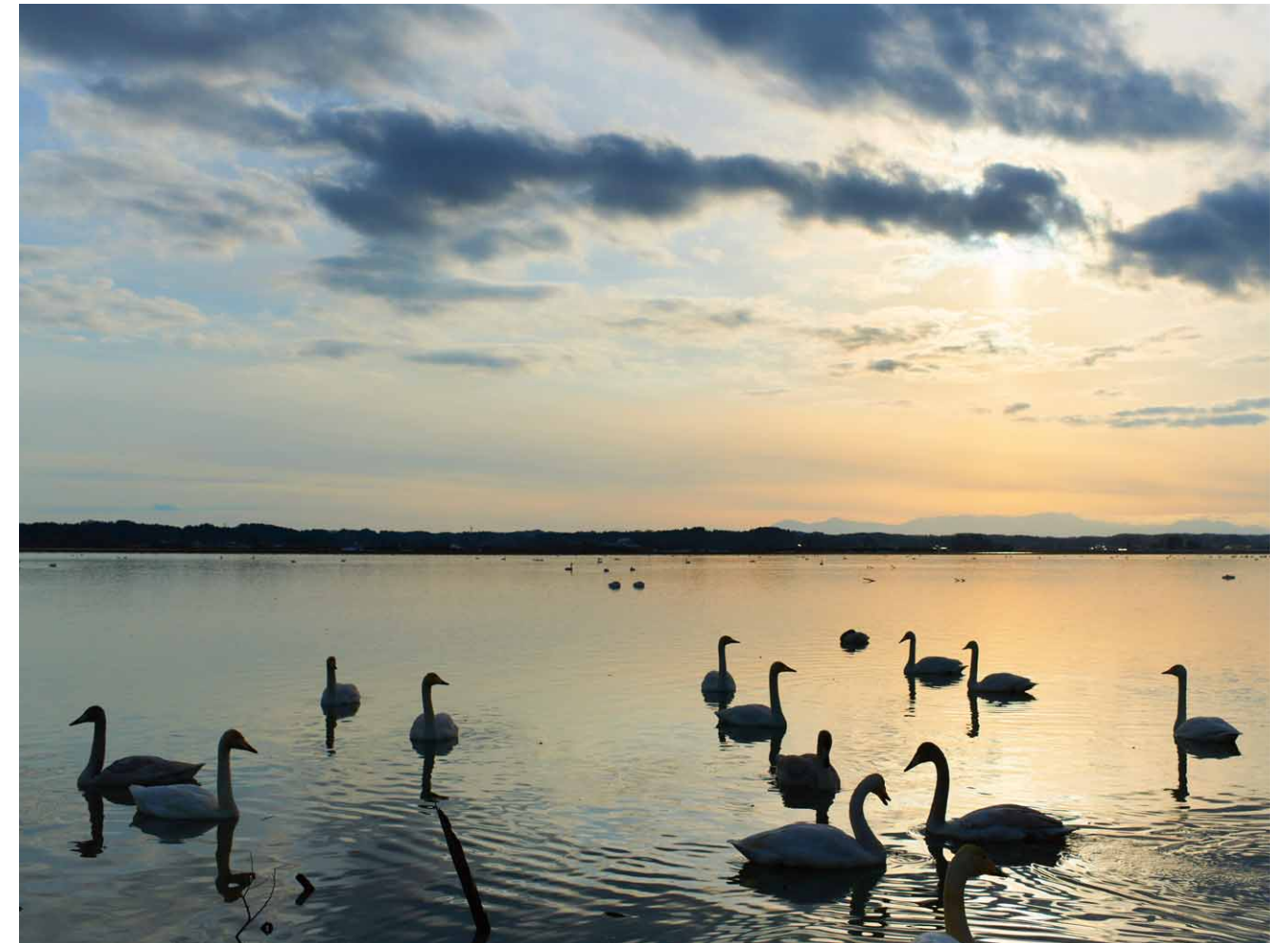
まちになれるのかもしれないですね。

高橋 確かにそうかもしれないですね。

吉村 時代の流れで、こういうカントリーサイドでも、やり次第では仕事がやれるようになってきたよね。史郎にはぜひ栗原にシリコンバレーを作ってほしい。

一同 (笑)。

編集後記



変わらないひとつの想い。

私の生まれた「栗原市若柳」は東北地方の中にあり、宮城県と岩手県の県境内陸部にある小さな東北の田舎町です。東北最大の政令指定都市・仙台市から新幹線で約25分。自然豊かなロケーションの中、春夏秋冬と北日本の彩り豊かな四季を感じる事の出来るとても素敵な場所です。

この小さな栗原市若柳に生まれ育ち、いろんな思い出がありながらも10代のころ別なものを求めてこの地元を飛び出しました。(同じ年ごろの多くの若者がそうするように)その後、いろいろな思いから日本中を旅し、仕事を通して世界中にある様々な街や人々との交流を積み重ねていく中で、自分の生まれ育ったこの小さな町のことを考える様になりました。その途中、東日本大震災を経験し、被災地として、過疎化の進む地方都市として、今後どうしていく事が自分に必要か？という想いから地元で起業する事を決めました。

春には、残雪の栗駒山を背景にした土手沿いの桜並木、夏は迫川に流れる灯籠と露天商で賑わう東北の田舎町らしい花火大会、秋には稔りを告げる稲田の風景、冬には伊豆沼に遥か遠くから訪れる渡り鳥の群れたち。

「ROOTS MAGAZINE」創刊の想いとして、このように、何もないと思っていたこの土地の魅力を、心からの感謝の想いで皆さんに伝えられることが、これからの地方にとって必要なことなのかなと思ってこのマガジンを発行させて頂きました。今回、取材や制作に協力していただいた多くの皆様にご場を借りて感謝の意を伝えると共に、今後も地域の皆さんと共に手を携えて「自分たちのルーツ」である地元の魅力をどしどし発信していきたいと思っています。ありがとうございました&これからもよろしくお願ひします。

吉村慶一